

## サシバの歌 — 伊良部島を訪ねて

宮古島市史編さん委員 本 永 清

I. 毎年旧暦9月の寒露の頃になると、宮古の上空に突如サシバ（通称タカ）の群れが現れる。宮古の風物詩、サシバの秋の渡りである。サシバはワシタカ科サシバ属に入り、フィリピンなど南の島々へ群れをなして渡る途中、羽を休めるため宮古に飛来して山中で一泊するという。伊良部島はその最大飛来地である。

2011年の秋、私は宮古へサシバが飛来したとの新聞記事を読んで、心が躍った。そして10月10日の朝、平良港から船に乗り、伊良部島の表玄関口である佐良浜港に着いた。つまり伊良部島へ渡ったわけであるが、これには特別な思いがあった。

私は以前、伊良部島でサシバの飛来を観察したことがある。青く澄み切った大空を悠々と舞い続けるサシバの群れは、じつに神秘的で壮観であった。その舞いをもう一度見たいとの思いが強かった。

だが、もう一つ別の目的もあった。野鳥研究家の久貝勝盛先生の著作『サシバを追う—宮古の野鳥たち』（2003年刊）の中に、伊良部島で古老たちから採集したというサシバの歌が2首紹介されている。その歌を私は、ぜひ地元で聞いてみたいと長年、思い続けてきた。サシバの飛来を観察しながら、歌も聞くことができれば幸いである。

伊良部島には1泊し、結局2日間にわたって、島内にお住まいの女性たちを訪ねてサシバの歌を聞いた。本稿はそのとき採集した歌に、若干の解説を加えたものである。遊び心で書いた拙い文章であるが、サシバと島の人たちとのつながりを理解する一助にはなろうと考えて、ここに公表した。

II. まず最初に、久貝先生が伊良部島で採集したサシバの歌を紹介しよう。久貝先生の本の内容とは掲載の順序が逆になるが、1首は次の通り。

すつぬ	といがまどんま	その	季節に	なると	サシバは
むどっち	みいらすが	必ず	みられるが		
どうぬ	ふっふあんみゃ	死んだ	わが	子は	
どうちが	みいらいんが	どうして	もどって	こないのか	

(久貝勝盛『サシバを追う—宮古の野鳥たち』より)

サシバは毎年その時節になると島へ飛来する。けれども、亡くなったわが子は、私のもとへ帰ることはない。病気か何かで、その子は亡くなったのだろうか。母親の胸中に深く刻み

込まれた悲しみと痛恨。わが子への愛しい思いを母親は、島に飛来するサシバに託してうたう。もう1首は次の通り。

くがつん まい ふう タカがまどんま 旧暦9月に 飛来する サシバは  
すつつあ しっしど とうびまい ふう 毎年 季節を 知って 飛んで くる

くがつん まい ふう タカがまどんま 旧暦9月に 飛来する サシバは  
すまぬ ばん むらぬ ばんちど 島や 村を 守る ために  
ぬくいあむぬ 居残る  
どうたまい すまぬ ばんちど 自分たちも 島や 村を 守る ために  
ぬくらじてい 頑張ろう

(同上)

毎年9月その時節を知って島に飛来するサシバは、島や村を守るため居残るといふ。私たちも、島や村を守って、ともに長生きするとしよう。サシバに託して、長寿を祈願する歌。

これは越冬サシバのことをうたっていると久貝先生は述べる。越冬サシバとは、仲間の群れが飛び去った後、島に残って越冬するサシバのこと。日中、集落の上空を孤高に飛翔している姿を目にすることができる。島の人たちは古来、この越冬サシバに特別の感情を抱いてきたようで、方言でスマバンダカ（島を守る鷹）と呼んで大切にするという。この歌の背景には、島の人たちの越冬サシバに対する愛着がある。

ところで、この歌は2首とも、文学の世界でいう寄物陳思の表現形式をとっている。歌い手がその心をサシバに託してうたう。日頃からサシバが島の人たちにとって、いかに身近な存在であったかということになろう。実際、サシバのことになると島の人たちは話題に事欠かないという。寄物陳思の表現形式は、万葉集の歌などにも見えるが、伊良部島の歌にそれがあることに注目したい。

Ⅲ. 当日の午後、私は佐良浜にお住まいの森田秋さん（昭和4年生まれ）をご自宅に訪問した。週の月曜日であったが、平良の街から幼いお孫さん（男の子）が遊びに来ていた。森田さんはそのお孫さんのお相手をしていた。森田さんは地域でもよく知られる歌い手で、これまで周囲から薦められて、伊良部島観光協会主催の恒例行事「伊良部トーガニー大会」に何度も出場し、多くの賞を得ていた。「私は、歌はうまくないよ。」——そう謙遜しながら森田さんは、周りによく響く高い声で、サシバの歌をうたった。即興であった。

○ kugatsin mai fu: taka 九月に舞い来る鷹

【歌の大意】九月にこの島の上空へ舞い来る鷹でさえ、島の守り手として、島に残るといふ。私達も島の守り手として、島に残って長生きするとしよう。長寿祈願の歌。

jaija: ju:i:	ヤイヤー ユーイー
kugatsin mai fu:	九月に 舞い 来る
takagamadummajo:	愛すべき 小鷹でさえも
simanuju bantidu ira	島の 守り手と して イラ
nukurija uija munujo:i:	残って いるのだそうだ
dujuta:mai ma:n	私達も マーン
natsin mai fu: ira	夏に 舞い 来る イラ
takagamanu nja:ndu	愛すべき 小鷹の ように
simanju: banti:	島の 守り手と して
nukurija uradijo:	残って いようよ

【語注】

- jaija: ju:i: 歌い出しのかけ声。「さあ、歌うぞ」の意。
- takagamadummajo: 愛すべき小鷹でさえも。taka はサシバのこと。-gama は小さいものに対する愛称。-dumma は「～でさえも」。-jo:i:は調子を調えるための語。
- simanju bantidu 島の守り手として。sima は島、村、集落などの意。-nu は「～の」。-ju は調子を調えるための語。ban は「番」の意だが、ここでは「守り手」と訳した。-ti は「として」。-du は強調の「ぞ」。
- ira 相手に同意を求めたり、念を押す語。
- nukurija uija munujo:i: 残っているのだそうだ。-ja は「～は」。munu は共通語に訳しにくい。ここでは「～のだそうだ」と意識した。jo:i: は調子を調えるための語。
- dujuta:mai 私達も。私もあなたも。duju は私。ta:は「～たち」。mai は「～も」。歌い手がその思いを一人称単数ではなく、聞き手も含めた複数の型式でうたうのは、歌い手と聞き手との間に、ある種の一体感ができているからであろう。
- ma:n 標準語に訳しにくい語。「本当のこと」「だからね」「そうだよね」のニュアンスを含むが、ここではあえて訳さなかった。
- nja:n 比況を表す語。～のように。
- uradi 居ろう。ここでは「長生きしよう」の意。-di は意志を表す。

## 【修辭法】

### ①対語

takagama (愛すべき小鷹) と dujuta: (私たち)。

### ②くり返し

歌い出しを除いて、歌の前半と後半は、ほぼくり返しになっている。

### ③直喩

takagamanu nja:ndu (愛すべき小鷹のように)。

### ④具象による内省的世界の表現

九月にその時節を知って島に飛来し、居残るサシバに託して、長寿を祈願する内容となっている。

【構成】この歌は、全体が3段から構成されている。

1段：歌い出しのかけ声の部分（1行目）。

2段：島に飛来したサシバがなぜ、居残るのか、その理由を述べる部分（2行目～5行目）。

3段：島に居残ったサシバに託して、長寿を祈願する部分（6行目～最後の行）。

【解説】久貝先生が採録したサシバの歌2首のうち、その一つと内容、形式ともほぼ同じである。ただ、その表現に個人差か、部分的な違いが見られる。

この歌を解釈するキーワードは si'imanuju ban (島の番)、つまり島の守り手である。歌い手は、島の上空を飛びまわる越冬サシバに対して、それは島を守るために残ったのだと感情を移入し、私たちも島を守るため、島に残って長生きしようと思ふ。これも寄物陳思の歌である。

IV. 「また、お出でね。」と笑顔でおっしゃる森田さんに、こちらも笑顔で丁重にお礼を述べてご自宅を後にした。外は雲が低い。どこへ行くという当てもないので、しばらく集落内を歩いていると、佐和田行きのバスが来たのでそれにとび乗った。バスはゆっくり島の中央部を走って、窓から眺めると一面美しいサトウキビ畑である。胸中今年の豊作を祈らずにはいられなかった。島の面積はそう広くない。バスはすぐに伊良部、仲地の両集落を通過し、国仲集落の近くまで来ていた。国仲には、私が以前、民俗調査でお世話になった手登根タケさんが住んでいらっしゃる。国仲のバス停で下車することにした。

ところが、私がバス停に下り立った途端、小雨がパラパラと落ちてきた。近くにいた中学生が数人駆けてきて、民家の軒下に隠れた。私もその軒下に入った。中学生の話し声は底抜けに明るい。部活の帰りのようで、身につけたユニフォームが上下とも泥で汚れていた。

空を見上げると南の方から雨雲がその厚さを増して急速に迫ってくる。これはいかんと思つて、民家の軒下を出て先を急いだ。途中にコインランドリーがあったので、そこの軒下に入った。軒は、入口の部分だけプラスチック製の板張りになっていて、雨宿りには充分の広

さである。ほっとして息を深く吸い込んだ。やがて、ザーツという激しい音とともに、雨はどしゃ降りとなった。

どこの家庭でも主婦は忙しいと見える。大雨の中、軽自動車でランドリーにやって来た女性は、すばやく自動車のドアを開けると、中から大きく膨らんだビニール袋を取り出し、抱えるようにして店の中へ入った。店の中では立ち止まって、一瞥するようにして、稼働していない洗濯機を見分ける。それから近づいてふたを開けると、ビニール袋の中から洗濯物を取り出し、無造作に洗濯機の中に放り込んだ。壁に洗濯＋乾燥 500 円と張り紙がしてある。女性がコインの投入口に 500 円玉を入れたのであろう。洗濯機がうなり声を上げて動き出し、それを確かめると女性は、急ぎ足で店を出て、再び自動車に乗り込んだ。いったん帰宅して家事でも済みますのであろう。約 2 時間後、洗濯物が乾いた頃に、女性はまた車でやって来て、洗濯物を急いで持ち帰った。

V. 晴れない雨はない。この言葉に特別の意味はないが、こうして一人で佇んで口ずさんでみると、どこか哲学めいておもしろい。どしゃ降りだった雨も、夕方には止んだ。私はランドリーの軒下を出て、手登根さんのご自宅に向かった。前回の訪問が 3 年前だから、久しぶりである。

手登根さんは、市営団地にお一人でお住まいであった。お訪ねすると私の顔を覚えていて、「よく来たね。」という表情でお茶を勧めてくれた。私が歌を習いに来たと言げると、「前にも、いっぱい教えたじゃない。」と切りかえしてきた。確かに、私は前に訪問したとき、手登根さんから歌をいくつか教えてもらっていた。

「うん。今度はサシバの歌。」

「風邪を引いてしまって、喉がおかしいよ。」

これは仕方がないなと思って、世間話をしていると、しばらくして手登根さんから、

「じゃあ、うたおうかね。」

と言ってきた。

「大丈夫ですか？」

「うん、何とかうたうよ。」

手登根さんのご高齢だし、私は心配であった。しかし、手登根さんは、お茶を一口、二口飲んで、喉を潤してから、背筋をしゃんと伸ばして、

「うたうわよ。」

私はあわてて、手提げ袋から小型のテープレコーダを取り出し、手登根さんの前に置いた。手登根さんは、高くもなく低くもない声で、サシバの歌をうたった。これも即興であった。

○ kugats'in mai fu: taka 九月に舞い来る鷹

【歌の大意】九月に宮古の上空へ舞い来る鷹でさえ、島の守り手、邦の守り手として、この島に残るといふ。私達も島の守り手、邦の守り手として、島に残って長生きするとしよう。長寿祈願の歌。

jaija: jo:	ヤイヤー ヨー
kugats'im mai fu: ntsa	九月に 舞い 来る ンツァ
takagamadummajo:	愛すべき 小鷹でさえ
sīmanu bantiju	島の 守り手と して
kuninu bantidu	邦の 守り手と して
nukulza munutimjo:	残るのだそうだ
dujuta:mai ntsa	私達も ンツァ
sīmanuju bantidu	島の 守り手と して
kuninu banti:	邦の 守り手と して
nukurija mi:dijo:	残ると しよう

【語注】

- jaija: jo: 歌い出しのかけ声。
- ntsa 相手に同意を求めたり、念を押す語。
- kuni 邦。国。sīma (島、村、集落など) の同義語。
- mi:di 補助動詞。～みよう。

【修辞法】

①対語・対句

takagama (愛すべき小鷹) と duju: (私達) は対語。sīmanuju ban (島の守り手) と kuninu ban (邦の守り手) は対句。

②くり返し

森田秋さんの歌に同じ。

③具象による内省的世界の表現

森田秋さんの歌に同じ。

【構成】この歌は、全体が三段から構成されている。

1 段：歌い出しのかけ声の部分 (1 行目)。

2 段：島に飛来したサシバがなぜ、居残るのか、その理由を述べる部分 (2 行目～6 行)

目)。

3段：島に居残ったサシバに託して、長寿を祈願する部分(7行目～最後の行)。

【解説】この歌は、その内容、形式とも、久貝先生が採録したサシバの歌、森田秋さんがうたったサシバの歌とほぼ同じである。この歌を解釈するキーワードは、

sīmanu ban (島の守り手)

kuninu ban (邦の守り手)

の二つの語句である。歌い手は、越冬サシバにその感情を移入し、サシバを島の守り手、邦の守り手として考え、自分たちもそのサシバのように、島に残って長生きしようとうたう。これも寄物陳思の歌である。

VI. 手登根さんは、昔のことをよく覚えていらっしゃる。サシバの歌の他にも、歌にまつわる伝承などを聞かせてもらった。手登根さんと話していると楽しくて、つい時間を忘れてしまう。もっとそばでお話が聞きたいと思ったが、夕方という時間帯を考えて、ご自宅を辞することにした。「お元気で暮らして下さい。」と伝えると、「また、おいでよ。」と笑顔で見送ってくれた。

外はどんよりと曇っている。いつ雨が落ちるか分からない。バス停の所に戻り、タクシーを拾って、予約しておいたホテルに向かった。ホテルは佐和田の海浜沿いにあった。

VII. 翌朝の10時頃、ホテルから出て国仲集落へ向かって歩いていると、携帯電話のベルが鳴った。久貝勝盛先生だった。2日前、久貝先生は県外にいた。宮古に帰って私が伊良部島へ向かったという情報を得て、電話してくれたのだった。今から迎えに行くからと言って、約5分後には車を走らせてきた。久貝先生は、毎年寒露の頃になると、飛来するサシバの観察で伊良部島に来ていた。久貝先生や宮古野鳥の会のメンバーの観察で、サシバの飛来に関しては詳細な記録がとられ、多くのデータが蓄積されている。

久貝先生には以前、サシバの歌を録音したいと伝えていた。そのことを覚えて下さっていて、それでは今日、実行しようということになった。私は、昨日の調査のことを久貝先生に伝えた。私の関心は今、島に飛来するサシバに託してわが子の死を悲しむ母親の歌に移っていた。しかし、久貝先生は、その歌をどこで、どなたから採集したのか、肝心なことをすっかり忘却していた。当時は道端の木陰などで女性たちが涼をとっていたというから、あるいはその方々から聞き取ったのかもしれない。……これは仕方がないということで、新たなインフォーマントをさがすことになった。久貝先生とお知り合いの方が佐和田集落におられた。酒造会社の社長、渡久山毅さんである。ご自宅を訪ねて、調査の協力をお願いした。

久貝先生、渡久山さん、私と3名で、国仲にお住まいの吉浜ツルさんを訪問した。吉浜さ

んには、私も以前、歌の調査でお世話になったことがある。吉浜さんは、なかなかの歌い手で、近日開催予定の「伊良部トーガニー大会」に出場なさるということであつた。私たちの頼みに快く応えて、吉浜さんがうたったサシバの歌は、森田秋さんや手登根タケさんのそれと同じ発想のものであつた。

○ kugats'in mai fu: taka 九月に舞い来る鷹

【歌の大意】九月に宮古の上空へ舞い来る鷹でさえ、山の守り手、島の守り手として、この島に残るといふ。私たちも、島の守り手、宮古の守り手として、島に残つて長生きするとしよう。長寿祈願の歌。

kugats'in mai fu:	九月に 舞い 来る
takagamadummajo:	愛すべき 小鷹でさえ
jamanu bantidu	山の 守り手と して
s'imanu bantidu	島の 守り手と して
nukulza munujo:	残るのだそうだ
dujutamai ntsa	私たちも ンツァ
s'imanu bantidu	島の 守り手と して
mijakunu bantidu	宮古の 守り手と して
nukurija mi:dijo:	残ると しようよ
bakja: nindzuta:jo:	私たち 仲間

【語注】

- jamanu ban 「山の番」。山の守り手。越冬サシバは、一定の山中を縄張りにしていて、そこから餌を求めて島全体に行動範囲を広げる。
- mijaku 宮古、集落、この世、現世、一生、人生、樂園などの意がある。ここでは宮古の意に解した。
- bakja: nindzuta:jo: 私たち仲間。ba は「私」。kja は「～たち」。nindzu は「人数」で、仲間、同士のこと。

【修辭法】

①対語・対句

takagama (小鷹) と dujuta (自分たち) は対語。jamanu ban (山の守り手) と s'imanu ban (島の守り手)、s'imanu ban (島の守り手) と mijakunu ban (宮古の守り手)



は対句。

②くり返し

他の歌に同じ。

③具象による内省的世界の表現

他の歌に同じ。

【構成】この歌には、他のサシバの歌と違って、歌い出しのかけ声がない。そのため、全体は2段構成である。

1段：島に飛来したサシバがなぜ、居残るのか、その理由を述べる部分（1行目～5行目）。

2段：島に居残ったサシバに託して、長寿を祈願する部分（6行目～最後の行）。

【解説】この歌は、その内容、形式とも、他の歌とほぼ同じである。ただ、歌の前半と後半の内容をつなぐキーワードは、他の歌の場合と違って、同一ではない。前半では

jamanu ban (山の守り手)

sīmanu ban (島の守り手)

とあるが、後半では

sīmanu ban (島の守り手)

mijakunu ban (宮古の守り手)

となる。山、島、宮古とだんだん、歌い進むにつれて言葉のカテゴリーが拡大する。こうした言葉の使い方も、歌の世界では許容されるのであろう。

VIII. 以上、私が伊良部島で採録したサシバの歌を3首ばかり紹介した。結局、サシバに託してわが子の死を悲しむ母親の歌は採集できなかったが、ここに紹介した3首はどれも地元で「島トーガニ」と呼ばれる歌のジャンルに属する。島トーガニとは、宮古の代表的な民謡の一つとして人口に膾炙されている「伊良部トーガニ」に対して、島独自の歌という意味であろう。即興でうたうのを特徴とする。なお、サシバの歌の他にも、伊良部の各集落には、島トーガニのジャンルに属する歌が数多くうたわれている。

さて、ここに紹介したサシバの歌は、久貝先生が採録した1首を除けば、その内容、形式ともほぼ同じであるという点で、類歌と称してよかろう。しかし、類歌は、見方によっては歌のバリエーションである。なぜ、一つの狭い島内に、こうした歌のバリエーションが生じるのか。そこには民俗社会における歌の伝承という問題が横たわっているように見えるが、そのことについてはいずれ述べる機会があろう。

IX. 伊良部島には、私は1泊をはさんで2日間滞在した。2日目は、久貝先生に誘われて旧伊良部町役場の旧庁舎の屋上でサシバの観察も行った。サシバの観察には、県外からも参加者が数名いて、久貝先生とサシバのことを話されていた。近くの伊良部中学校からも教師に引率されて生徒たちが10数名、サシバの観察にやってくる。しかし、その日は新たな群れは現れなかった。こうした天候不順の日に、まずサシバは飛来しないと、久貝先生はおっしゃる。残念ではあったが、ただ遙か南の方角に目をやると、伊良部島と隣接する下地島の上空あたりに、件のスマバンダカ（島を守る鷹）の舞う姿がかすかに見えた。ゆっくり姿を追って数えていくと四羽いた。これに私は大いに満足して、久貝先生たちとはその場で別れて、庁舎の階段を下りると、ご親切な役場職員の車に同乗させてもらって再び佐和田へ向かった。佐和田では、歌がうまいという女性2人の方にお会いして、島トーガニを数首うたってもらった。しかし、お二人から私が期待したサシバの歌は聞けなかった。その後、私は伊良部小学校の門前のバス停まで歩き、そこから佐良浜行きのバスに乗って、もと来た道を港へ戻った。秋の昼下がりとはいえ、サトウキビ畑から吹いてくる風はやはりうまかった。

X. 最後に、インフォーマントの森田秋さん、手登根タケさん、吉浜ツルさん、調査にご協力下さった渡久山毅さん、特別の計らいをして下さった久貝勝盛先生に、心から深謝申し上げます。（完）